

頑迷固陋の戒め

「頑迷固陋の「固陋」という漢字をはじめ読めなかった。

調べると、固陋は「ころう」と読み、四字熟語の意味は「頑固で視野が狭く、道理をわきまえない。自分の考えに固執し柔軟性もなく、正しい判断もできない。頭が固く、見識も狭い」とある。

なんとも、悪口とすれば言いたい放題である。これなら、「頑迷固陋な爺イだと言われたら死んじまえと言われているようなものだ。待てよと思う。自分の頑固さは持つてる哲学から来てるのだし、視野だって狭くはない。まして道理はこれ以上ないほどわきまえている。自分の考えに固執、なるほど固執する面は無きにも非ずだが最後まで押し通しはしない。次の柔軟性は、自分で言うのもおかしいが人一倍富んできると思っている。まして正しい判断なんて当たり前のことだ。頭だって柔らかいし、見識：見識は自他ともに認めるところである。

よって自分は頑迷固陋な爺イではない、と思いつつ、内心では不安なのである。

インターネットの辞書にはこんな言葉も載っている。「古い考え方や習慣を改めよ

うとせず、新しい物事を拒むさま」

思い当たるのである。デジタル腕時計が出た時、そんなの時計じゃないと笑ったし、ワープロも手にしたのは最後の方だった。ましてスマホはまだ使いこなせないし、変なところを押すと、有料か、と慌てて消してしまう。パソコンに取りついたので会社から支給されてやむなく手にしたのである。新しいものにすぐ飛びつく若者を軽薄だと決めつけてもいた。まさに「新しい物事を拒むさま」だったのである。鈍感で、イノベーションとは遠いところに自分が居たのは間違いない。

でも、それだけでは頑迷固陋とまでは言えないのではなからうか。

習慣だってそう。何を直せと言うのだ。目玉焼きは半熟、味噌汁には豆腐、頭の活性化のためのタバコ、睡眠導入剤の剣豪小説、夜更かしの朝寝、歌うは演歌、訳の分からない今流の歌など覚える気もない。スマホに憑りつかれている若者には、もつと本を読んで勉強しろと言いたくなる。本を読むのが勉強であり、価値観や教養は読書によって養われると信じて疑わない。



元IBC岩手放送
会長

阿部 正樹

辞書が言う「古い考えや習慣を改めよう」とせず：「ムツとくる。何を言うか、古い考えや習慣がすべて悪いというのか、そう決めつける事こそ頑迷そのものではないか。新しい考えがすべて正しく、良いわけでもあるまい。次々に言い訳じみた不満が湧いてくる。

友人の言葉を思い出す。「それぞれの世界で権威や権力を持つてしまうと、本人の錯覚も併せて頑迷固陋になる人が多いんだよ」そうかと納得し、色んな人の顔が浮かぶ。だが、その中に自分が入っていない。

老人施設のヘルパーさんが、一番手を焼くのが昔偉かった人だという。プライドが高く、思い通りにならないと居丈高に激昂するらしい。

正直に言おう。頑迷固陋が怖いのである。いや、すでにそうなっているのかもしれない。年を経るごとに更にひどくなっているか、不安は募る。

本屋で立ち読みした本に「高齢者になるとボケるか、頑迷固陋になるかどちらかである」と断定してあり、慌てて本を閉じた。どっちにもなりたくないのである。